

# 日本語教育通信

http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/index.html

編集 独立行政法人 国際交流基金

## 第64号

2009年5月～9月



JAPAN FOUNDATION

### 目次



**日本語教育ニュース** 2009年8月  
第12回  
若手日本語教師を10ヶ月間派遣  
～JENESYS若手日本語教師派遣プログラム～



**授業のヒント** 2009年5月  
漢字を楽しく学ぶ10分活動



**新聞・雑誌から見る現代日本** 2009年7月  
第32回  
世襲議員の是非



**文法を楽しく** 2009年6月  
「とたん(に)」と「や否や」



**本ばこ** 2009年5月～9月  
新刊教材・図書紹介

### Contents



**Nihongo Kyoiku News** Sep, 2009  
**Dispatch of Young Japanese-Language Teachers for Ten Months**  
- JENESYS Young Japanese-Language Teacher Dispatch Program -



**Ideas for Japanese-Language Classrooms** May, 2009  
**Fun Kanji activity in 10 minutes**



**Aspects of Japan Today in the Newspaper and Magazine** Jul, 2009  
**Pros and Cons of Hereditary Lawmakers**



**Enjoy Japanese Grammar** Jun, 2009  
**totan(ni) & yainaya**



**Bookshelf** May-Sep, 2009  
**Introduction of New Titles**

### On the Web

以下の記事はウェブサイトのみにてご覧になれます。



**日本語・日本語教育を研究する** 2009年8月  
第37回  
接続詞の難しさ  
一橋大学留学生センター 石黒 圭



**Research on the Japanese Language & Japanese Language Education** Aug, 2009  
**Difficulties in using conjunctions**  
ISHIGURO Kei  
Center for Student Exchange  
Hitotsubashi University



**海外日本語教育レポート** 2009年9月  
第21回  
王立プノンベン大学(RUPP)日本語学科の設立  
日本語教育とこれからのカンボジアの発展との繋がり  
王立プノンベン大学日本語学科  
学科長 ロイ レスミー



**Current Report on Japanese-Language Education around the Globe** Sep, 2009  
**The Establishment of Japanese-Language Department, Royal University of Phnom Penh (RUPP)**  
Loch LEAKSMY  
Royal University of Phnom Penh  
Department of Japanese  
Head Department

### 『日本語教育通信』

編集：独立行政法人 国際交流基金  
〒330-0074 埼玉県さいたま市浦和区北浦和 5-6-36  
国際交流基金日本語国際センター  
TEL：+81-48-834-1183 FAX：+81-48-831-7846  
E-Mail：jfnckt@jpf.go.jp  
編集協力：株式会社アーバン・コネクションズ

### 編集部から

「日本語教育通信」は2009年5月から、印刷物としての発行を休止し、webサイトのみでの提供となりました。毎月、いずれかのコーナーの記事が更新されます。2009年5月から2009年9月までの記事をまとめて第64号としました。印刷して保存するときにこの表紙をお使いください。



# 日本語教育ニュース

にほんご きょういく

若手日本語教師を10ヶ月間派遣～JENESYS 若手日本語教師派遣プログラム～

国際交流基金 さくらネットワークチーム 大伴 裕咲

JENESYS プログラムとは、日本政府が進める「21世紀東アジア青少年大交流計画」(Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths) のことで、アジア、オセアニア地域の高校生や大学生、教師、その他様々な分野で活躍する人々を日本に招いたり、日本の若者を派遣したりする大規模な交流事業です。国際交流基金はこの JENESYS プログラムに協力し、いくつかのプログラムを実施しています。今回はその中の一つ、「JENESYS 若手日本語教師派遣プログラム」について紹介します。

JENESYS 若手日本語教師派遣プログラムは、大学で日本語教育を専攻したり、日本語を教えた経験のある日本の若者を、東南アジアやオセアニア地域の日本語教育機関などに約10ヶ月間派遣するものです。現地の日本語教師と協力して日本語を教えたり、文化の紹介をしたり、日本に対する理解と興味をいっそう深めてもらうと同時に、日本の若者の国際理解を進めることを目的としています。

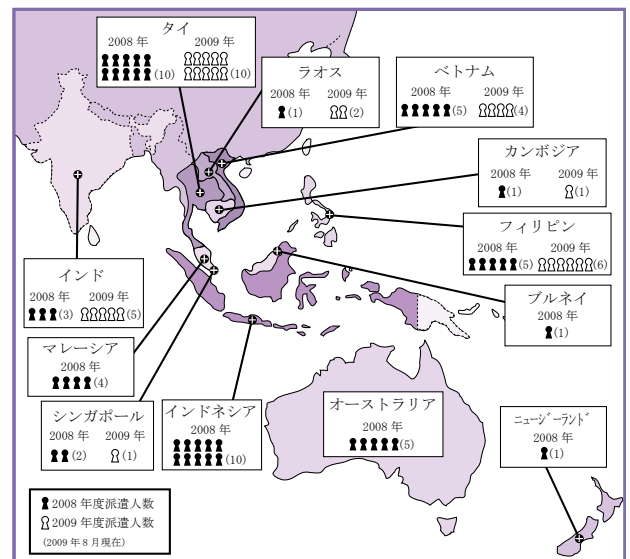
2008年度には48人の教師を派遣しました。今年度は、既に派遣した人も含め60人を派遣する予定です。

派遣される若手日本語教師は、多数の応募者の中から厳しい審査を経て選ばれます。そして、赴任の前には、日本語国際センター（浦和）で2週間の研修を受けることになっています。研修では現地の日本語教育事情の

ほか、海外における日本語教授法、文化学習の方法など、海外で日本語教育を行うために必要な知識と技術を身につけ、自らの役割に対する意識を高められるようにしています。日本語国際センターには、世界各国から大勢のノンネイティブ日本語教師が、研修を受けるために滞在しています。これらの教師から話を聞いたり、協力して日本語授業を計画する活動が研修に組み込まれているので、海外の教育現場の状況や、ノンネイティブ教師と協働で日本語教育にあたるということがどういうことなのか、情報を得たり体験することができます。たとえ派遣される国から来ている教師とめぐり会えなくても、派遣後のイメージが抱きやすくなっています。

また、それぞれの国へ派遣された後も、現地にある国際交流基金の海外事務所が、研修を行ったり相談にのるなど、若手日本語教師が現地で円滑に日本語教育にあたるよう支えています。

実際に、若手日本語教師として派遣された4人の方に、現地での活動や、現地の先生や生徒との交流について語ってもらいました。これからたくさんの交流が生まれることを期待しています。



## JENESYS 若手日本語教師派遣プログラムについて

外務省 HP: [http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc\\_koryu21/sdk\\_keikaku.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc_koryu21/sdk_keikaku.html)

国際交流基金 HP: <http://www.jpff.go.jp/j/japanese/new/0905/05-01.html>

## 派遣国：フィリピン

派遣期間：2008年6月～2009年4月

氏名：長谷川 有彦

私は、フィリピン

・ミンダナオ島の  
ダバオに10ヶ月  
赴任しました。  
派遣先のミンダナオ



国際大学は、フィリピンの日本語教育をリードする教育機関で、派遣当初は、そこで学生とどのように向き合うか、自分の役割とは何かを模索する日々でした。

初めは、学生と良好な関係を保つことばかり考え、常に優しく接しようとしていました。しかし2ヶ月経った頃から、時には敢えて厳しく接するよう心掛けました。それは、同僚の日本語教師の方のある言葉がきっかけでした。

「教師は辞められても、先生は辞められない」私が教師という仕事を辞めたとしても、教えた学生にとって、私はずっと「先生」という存在であり続け、私が教えたことがずっと彼らの中に残っていくということです。この言葉を聞いて、たとえ短期の派遣教師でも、学生と真剣に向き合うべきだと考えるようになりました。学生にとっては大変だったかもしれませんが、派遣期間が終わる頃には、彼らの大きな成長を見届けることができ、また多くの学生から感謝され、別れを惜しまれました。

そんな学生たちに、人として大切なことを気づかされることもありました。

8月の終戦記念日に、1年生の授業で戦争のことに話しました。フィリピンは、戦争で日本が占領し甚大な被害をもたらした国。やはり、日本人として過去の悲劇を忘れてはいけな思ったからです。その授業で、学生の一人が、「戦争のことを忘れてはいけなけれど…」と英語で言った後に、「私は日本が好きです」と、習ったばかりの日本語で言ってくれました。それは、私が日本語を教えているだけではなく、日本とフィリピンとの架け橋として教壇に立っていることを実感する瞬間でした。

経済的に豊かだとは言いがたいフィリピンでは、仕事やお金のために日本語を学ぶ学生も多く、日本から派遣されて日本語を教える私は、自分の仕事や立場に複雑な思いを持つこともありましたが、明るく前向きなフィリピンの学生との交流を通して、日本語教師のやりがいや再確認することができました。フィリピンで過ごした10ヶ月は、教師として、また人として、多くのことを学び、成長できた貴重な時間です。

## 派遣国：インド

派遣期間：2008年6月～2009年4月

氏名：池田 真希子

私は、インド

南東部、チェン  
ナイにある、  
在チェンナイ  
印日商工会議所



というところに赴任しました。学習者は中・高・大学生から、主婦、会社員、定年退職された60代の方とさまざまで、日本語に興味がある人や日本語をビジネスに活かしたいと考えている人など、皆やる気に満ち溢れていました。

そこで私が担当した業務は、現地の日本語教師の日本語トレーニング授業、学習者対象の授業、スピーチコンテストの指導、文化紹介等でした。私は、大学や専門学校の教壇実習などの経験を除いては教授経験がなく、自分が先生たちに授業をすることなどできるのか不安になりました。しかし、現地の先生が生の日本語に触れる機会がない現状を知り、また先生方の熱心な気持ちに動かされました。日本語の教師として必要なものを自分なりに考え、また先生方からの授業に対する要望や意見を取り入れ、試行錯誤しながら自由に授業をさせてもらいました。先生方から授業に対する要望ももらったとき、一瞬自分の授業が否定されているような気持ちになり焦りましたが、言われた通りに変えて授業をしてみると面白いほど授業の反応がよくなりました。率直に意見してくれ、こちらもそれを受け入れる、そういうやりとりから信頼関係が築かれ、私自身も学び、成長することができたように思います。

インドは、気候・食事・言語・文化など、日本とまるで違って、慣れるまでは苦労もありました。しかし、赴任先の日本語の先生や学習者、現地の方々と交流する中で、インド人の温かさ、寛大さ、愉快さや素直さなどの素晴らしさを知り、チェンナイが大好きになりました。旅行やビジネスとは違った視点から、インド人と交流することができたことが本当に貴重な体験になったと思っています。

この10ヶ月が無事に終わることができたのも、国際交流基金を始め、ニューデリー事務所、チェンナイ総領事館や派遣先の方々のおかげであり、大変感謝しております。そして、より多くの方々にこのような素晴らしい機会が与えられることを願っております。



派遣国：マレーシア

派遣期間：2009年1月～(2009年11月予定)

氏名：五十嵐 裕佳

私の受入機関である  
Sekolah Tun Fatimah

は全寮制の中高一貫女子校です。ここで私は、選択必修の第二外国語の授業で日本語を選択した学生に対して、



二人の現地の日本語教師の方と一緒に日本語を教えています。

私が担当する授業は全てチームティーチングで行われるため、授業前に先生方と一緒に授業の流れや活動の内容、そして必要な教材などを打ち合わせてから、授業に臨みます。実際のクラス内では活動に応じて私が主で教えたり、先生の補助に回ったりと、お互いの利点を生かした授業を目標に授業を進めています。発音に注意しながらの新出語の導入や、会話を中心とした応用練習、日本文化を紹介する場面では、私が主となることが多いです。特に、日本文化を取り扱うことが多い5年生の授業では『エリンが挑戦！にほんごできます。』<sup>1</sup>を用いて、高校生の生活やファッションについて日本とマレーシアを比較する活動も行いました。その際に生きたりソースである私に対して、学生から多くの質問が投げかけられたことが、とても印象的でした。

また、通常授業のほかに、日本文化や日本語に関連した行事や活動も担当します。4月にマレーシアの高校生を対象にした「高校生日本語スピーチ大会」の際には、出場学生の原稿作成からスピーチの練習まで私が中心となって指導を行いました。この先も、マレーシア全土の全寮制中高一貫校で日本語を学ぶ学生が、さまざまな日本文化を体験する「日本文化の日」や、ジョホール・バルで行われる盆踊り大会にも、学生や先生方と一緒に、準備をして参加する予定です。そのほかにも、日本語選択の学生だけではなく、その他の学生や教員の方々にも、より日本について知ってもらおうと、簡単な日本語を紹介する掲示物を学校内に掲示したり、学校行事に浴衣を着て参加したりするといった活動も行っています。

私自身も学校生活を通じてマレー語やマレーシアの文化を学ぶことができるので、毎日がとても新鮮です。残りの派遣期間も、より充実した日々を学生と過ごせるように、「教える」と「学ぶ」ことに取り組んでいこうと思います。

1 国際交流基金『エリンが挑戦！にほんごできます。』

派遣国：オーストラリア

派遣期間：2009年2月～(2009年12月予定)

氏名：永島 恭子

今年の2月から、ニューサウスウェールズ州教育訓練省に派遣され、現在フォートストリート高校と



日本語探検センターに日本語アシスタントとして配属されています。

日本語探検センターはニューサウスウェールズ州の教育訓練省が管理、運営する日本家屋の施設です。毎日各地から日本語を学んでいる生徒たちが探検センターを訪れ、様々なアクティビティを通して日本語を学んでいます。探検センターで実施しているアクティビティで使用する教材は、すべてスタッフが考案、作成したオリジナル教材です。私はここで週2回アシスタントをおこなうほか、少しずつですが教材開発の方にも関わらせていただいています。

もう一つの配属先、フォートストリート高校はシドニーの中心地からほど近いところに位置する公立の進学校です。日本語を含む外国語は、7、8年生(日本の中学1、2年生)は必修で、9年生から選択科目となります。12年生まで日本語を選択する生徒は、全員進学先を決めるHSC (Higher School Certificate) という卒業試験の受験科目に、日本語を選択しています。フォートストリート高校において、私はこのHSCで日本語を選択している12年生の試験対策を主におこなっています。

ここニューサウスウェールズ州の学校において、日本語は人気科目の一つです。しかし何年も日本語を勉強していても、ネイティブの日本語話者と話す機会がほとんどないという生徒は少なくありません。オーストラリア国内でもシドニーは特に移民が多く、街へ出ると様々な言語が聞こえてきます。もちろん多くの日本人もシドニーに滞在しています。そんなシドニーにおいても、新しい言語をいかにしてコミュニケーションの手段として学ばせるか、ということは大きな課題のようです。日本語探検センターでアシスタントをしていますが、現地の日本語の先生方の、生徒に少しでも生きた日本語にふれてほしいという思いが感じられます。

昨年まで地元福島の福島県でおこなっていた日本語指導とはずいぶん違うため、はじめはずいぶん戸惑いを感じていましたが、今は新たなチャレンジに、やりがいを感じる毎日です。



# Dispatch of Young Japanese-Language Teachers for Ten Months

– JENESYS Young Japanese-Language Teacher Dispatch Program –

Hiroe Otomo, Sakura Network Team, The Japan Foundation

The JENESYS Program – the Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths Program by the Japanese government – is a large-scale exchange project under which senior high school and college students, teachers and representative individuals in various fields in Asia and Oceania are invited to Japan and Japanese youths are sent to these regions. The Japan Foundation collaborates with the JENESYS Program and conducts several projects. In this issue, we would like to introduce one of these, the JENESYS Young Japanese-Language Teacher Dispatch Program.

Under the JENESYS Young Japanese-Language Teacher Dispatch Program, Japanese young people who have majored in Japanese-language education in university or who have taught Japanese are sent to Japanese-language education institutions in Southeast Asia and Oceania for approximately 10 months. The program's purposes are to teach Japanese in cooperation with local Japanese-language teachers, introduce Japanese culture, and deepen understanding and interest in Japan, in addition to promoting international understanding among Japanese young people.

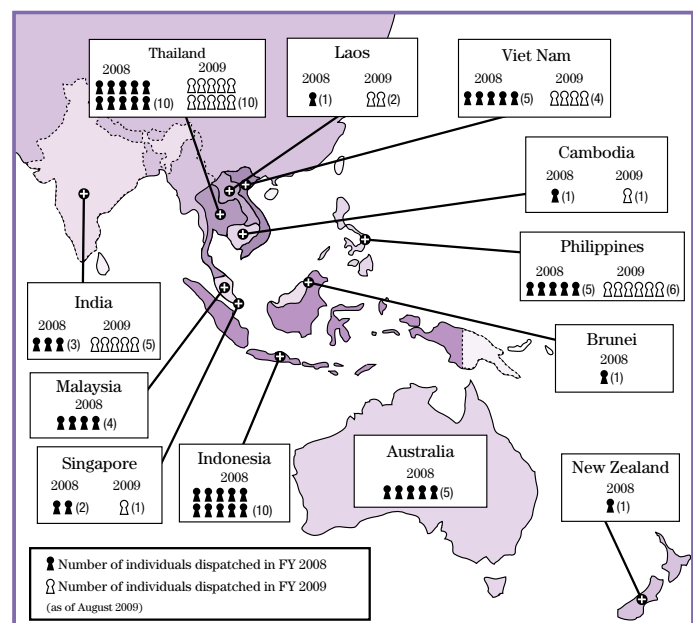
In fiscal year 2008, 48 teachers were dispatched. This year, the total will reach 60, including those already dispatched.

Young Japanese-language teachers are selected through strict screening from a large number of applicants. Prior to dispatch, they receive two weeks of training at The Japanese-Language Institute, Urawa (Saitama Pref.). During training they gain the knowledge and skills necessary to conduct Japanese-language education overseas, including knowledge of the local circumstances of Japanese-language education, Japanese-language pedagogy overseas and methods of culture study. This is designed to raise awareness of their roles. Many non-native Japanese-language teachers stay at The Japanese-Language Institute for training, and the curriculum of young Japanese-language teachers includes speaking with these non-native teachers and planning a Japanese-language lesson with them. This allows them to learn about the actual circumstances of education overseas and to have authentic experience of working with non-native teachers in Japanese-language education. Even when there is no teacher from the country to which they will be dispatched, young Japanese-language teachers are able to imagine the situations they will encounter.

In addition, local offices of The Japan Foundation support young Japanese-language teachers after dispatch through training and consultation to ensure that the education process proceeds smoothly at their assigned sites.

We asked four individuals who were sent overseas as young Japanese-language teachers to report on their activities and exchanges with local teachers and students. We hope to see more and more exchanges in coming years.

(All texts translated by Junko Igarashi & Tom Conrad)



## About JENESYS Young Japanese-Language Teachers Dispatch Program

Ministry of Foreign Affairs website: [http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc\\_koryu21/sdk\\_keikaku.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc_koryu21/sdk_keikaku.html)

The Japan Foundation website: <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/new/0905/05-01.html>

**Country of dispatch: Philippines**  
**Dispatch period: June 2008-April 2009**  
**Name: Arihiko Hasegawa**

I was assigned to Davao on Mindanao in the Philippines for 10 months. Mindanao International



College, the institution where I was sent, is a leader in Japanese-language education in the Philippines, and at the beginning I wondered for days how I should face my students and what my role should be.

At first I focused only on staying on a friendly footing with students and always tried to be gentle. After about two months, however, I was intentionally strict at times, a change that was triggered by a remark by a fellow Japanese-language teacher.

“You can quit teaching but you cannot stop being a teacher.” Even after I stop teaching as a profession, I will continue to be ‘a teacher’ for students I have taught, and things I have taught will stay with them forever. When I heard this, I realized that even a short-term temporary teacher needs to deal with students on a serious level. It might have been difficult for students, but by the time my assignment was up, I could see they had made significant progress, and many students expressed their appreciation; they found it tough to say good-bye.

From these students, I learned something important as a person.

On the anniversary of the end of World War II in August, I talked about the war in the first-year class. The Philippines is a country Japan occupied during the war and a place where we caused great damage. I thought that as a Japanese I should not forget the past tragedy. In that class, one student began in English, saying “although we shouldn’t forget the war,” and then continued in Japanese, using a pattern we had just learned: “I like Japan.” At that moment I realized that I was not only teaching Japanese but standing in front of the class as a bridge between Japan and the Philippines.

In the Philippines, where economic well-being is not widely seen, many students take Japanese out of necessity for their jobs or to make money, and as someone who was sent there to teach Japanese, I sometimes had mixed feelings about my job and position. However, through exchanges with cheerful and forward-thinking Filipino students, I reconfirmed that being a Japanese teacher is rewarding and meaningful for me. The 10 months I spent in the Philippines is a precious time when I learned a lot and grew both as a teacher and as a person.

**Country of dispatch: India**  
**Dispatch period: June 2008-April 2009**  
**Name: Makiko Ikeda**

I was sent to the Indo-Japan Chamber of Commerce & Industry in Chennai in southeast India. Students ranged



from junior and senior high school students and college students to housewives, company employees and retired individuals in their 60s, and included those who simply had an interest in the Japanese language to those who wanted to use it in business. All the students were very motivated.

My role included training local Japanese-language teachers, teaching students, preparing students for speech contests and introducing Japanese culture. Except for a teaching practicum at college and technical college, I did not have any teaching experience and worried if I would be able to instruct teachers. However, I decided to teach local teachers after learning that they had no opportunity to be exposed to the real Japanese language and of their eagerness. They let me teach freely through trial and error, based on my ideas about what is necessary for Japanese teachers and local teachers’ requests and opinions about class. When local teachers made a suggestion, at first I felt pressured because my ideas on teaching seemed to be rejected. However, reactions to my teaching improved incredibly when I changed my style. Receiving and accepting straightforward opinions – from such an exchange, mutual trust was established, and I was able to learn and grow.

India is very different from Japan in terms of climate, food, language and culture, and I encountered some difficulties until I became accustomed to them. However, through exchanges with Japanese teachers and students at the institution where I was sent as well as with other local people, I came to know the warmth, generosity and fun-loving and accepting nature of the Indian people, and I came to love Chennai. Being able to have exchanges with Indians on a level different from that of traveling or business was a truly valuable experience.

I am grateful to The Japan Foundation, its New Delhi office, the Chennai Consulate-General of Japan and the people at the Indo-Japan Chamber of Commerce & Industry for getting me through my 10-month stay. I hope that many more people will have this wonderful opportunity.

**Country of dispatch: Malaysia**

**Dispatch period: January 2009 (-November 2009)**

**Name: Yuka Igarashi**

Sekolah Tun Fatimah, the institution where I was sent, is a girls boarding school with an integrated lower and upper secondary education system. Here, with two local Japanese teachers, I teach students taking Japanese to meet the requirement for a second foreign language.



Team teaching is used in all the classes I am involved with. I discuss lesson flow, activity details and necessary teaching materials with other teachers prior to class. During classes themselves, we capitalize on each other's strengths, such as me taking the lead in certain activities or at other times assisting other teachers. I often take the lead when introducing new vocabulary and paying special attention to pronunciation as well as in advanced exercises focusing on conversation and introduction of Japanese culture. In the fifth grade class where Japanese culture is often discussed, we used *Erin's Challenge! I Can Speak Japanese.*<sup>1)</sup> to compare high school students' lifestyle and fashion in Japan and Malaysia; as a "living resource," I was asked a number of questions, and this made a strong impression on me.

Aside from teaching regular classes, I am also involved in events and activities that touch on Japanese culture and language. For the "Senior High School Students Japanese-language Speech Contest," which is held for senior high school students in Malaysia in April, I led instruction of participating students, from preparation of their speeches through practice of delivery. In coming months, together with the school and other teachers, I will be preparing for and participating in "Japanese Culture Day" for students taking Japanese at schools all over Malaysia with an integrated lower and upper secondary education system as well as getting ready for the *bon-odori* contest that takes place in Johor Bahru. In addition, to raise the level of knowledge of Japan not only among students who take Japanese classes but also among other students and teachers, I post materials on the introduction of simple Japanese in school and wear a *yukata* when I participate in school events.

Every day is very new because I learn the Malay language and culture through school life. From the standpoints of both teaching and learning, I am striving to make my remaining time here with students more productive and fulfilling.

1) The Japan Foundation. *Erin's Challenge! I Can Speak Japanese.*  
[http://www.jpff.go.jp/j/urawa/j\\_rsorcs/erin/index.html](http://www.jpff.go.jp/j/urawa/j_rsorcs/erin/index.html)

**Country of dispatch: Australia**

**Dispatch period: February 2009 (-December 2009)**

**Name: Kyoko Nagashima**

I was sent to the New South Wales (NSW) Department of Education and Training in February this year. I am currently assigned to Fort Street High School and Nihongo Tanken Centre as a Japanese-language assistant.



Nihongo Tanken Centre is a Japanese-house facility that is managed and operated by the Department of Education and Training. Every day, students taking Japanese at various locations visit the center and learn Japanese through various activities. All teaching materials used in the activities are original and have been developed and created by staff. I work here twice a week as an assistant and also have been gradually getting involved in teaching material development.

My other assignment, Fort Street High School, is a selective public school located near central Sydney. A foreign language (Japanese is one of the options) is a requirement for the seventh and eighth grades (first and second years at junior high school in Japan) and is elective from the ninth grade. All students who study Japanese through the 12<sup>th</sup> grade choose it as a subject for the graduation exam -- called the Higher School Certificate (HSC) -- which determines the institution of their higher education. At Fort Street High School, I mainly teach 12<sup>th</sup> grade students who have chosen Japanese for the HSC to be ready for the exam.

Japanese is a popular subject at schools in New South Wales State. However, no matter how long students have been taking Japanese, not many have the opportunity to talk with native Japanese speakers. Within Australia, Sydney has a particularly high immigrant population, and various languages are heard in town. Of course, many Japanese people are staying in Sydney. Yet even in a city like Sydney, how to teach a new language as a way to communicate is a challenging task. Through my assistant work at the Nihongo Tanken Centre, I sense the desire of local Japanese teachers to expose their students as much as possible to real Japanese.

Teaching here is very different from the Japanese-language instruction I did in Fukushima Prefecture where I grew up, and I often found myself puzzled at the beginning. Now, every day I find the new challenges to be very rewarding.



# 授業のヒント

じゅ ぎょう

テーマ

漢字を楽しく学ぶ10分活動

かん じ たの まな ぶん かつ どう

目的 むくてき
<ul style="list-style-type: none"> <li>楽しい活動を通して漢字学習の方法を知る。</li> <li>短い時間で漢字を楽しく学ぶ。</li> </ul>
学習者のタイプ がくしゅうしゃ
初級～中級半ば じょきゅう ちゅうきゅうなか
クラスの人数 にんずう
何人でも なんにん
準備するもの じゆんび
バラバラ漢字カードや漢字カード かん じ

10分間のできる楽しく漢字を学ぶ活動を紹介します。

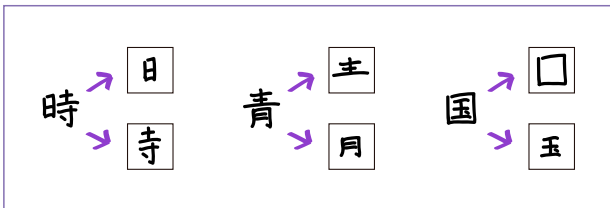
## ◆バラバラ漢字カード

教室全体で行う活動です。1つの漢字を2つの部分に分けたカードを組み合わせて、漢字を作ります。漢字が部分の組み合わせでできていることや、組み合わせ方で大きさやバランスが違ってくることに注目します。

### 準備

教師はこれまでに指導した漢字を5～10字選びます。それぞれの漢字を左右・上下・外中のように2つに分けて、バラバラ漢字カードを作ります。

### バラバラ漢字カード 例

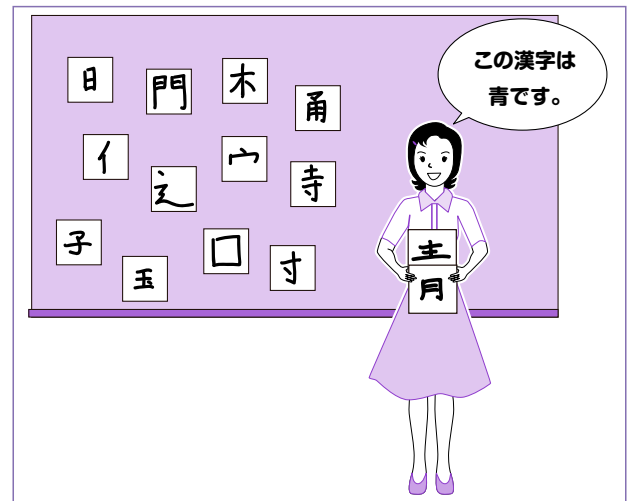


### 活動方法

- 1: バラバラ漢字カードを黒板に貼ります。
- 2: 教師は学習者1人を指名します。
- 3: 指名された学習者は黒板に貼ってあるバラバラ漢字カード2枚を取り、1つの漢字を作ります。
- 4: 学習者は「この漢字は青です」「この漢字は通るです」のように説明します。
- 5: 学習者が存在しない漢字を作ったり、説明を間違えたりしたら、カードを黒板に戻します。
- 6: 黒板のカードがなくなったら終わりです。もし最後に

組み合わせられないカードが残ってしまったら、そのカードを使って、学習者は別の漢字を考えます。例えば、「口（くにがまえ）が残った場合、「口」を使って「口+玉=国」のように学習者が考えた漢字を説明します。

- \* 教室全体でこの活動をすることもできますし、2～4人のグループに分かれて、黒板の代わりに机を使って活動することもできます。



## ◆意味の仲間はどれ？

チーム対抗で正確さと速さを競う活動です。2～4人のチームで、漢字を意味のグループに分けます。漢字1字1字の持つ意味に注目します。

### 準備

教師はこれまでに指導した漢字を9～12字選びます。選ぶとき、意味のまとまりができるようにします。例えば「足・手・耳・目」が体のグループ、「犬・牛・魚・鳥」が動物のグループ、「青・赤・黒・白」が色のグループのように作ります。チームの数だけ同じ漢字カードを用意します。

### 活動方法

- 1: 机の上に漢字カードをばらばらに置きます。
- 2: 同じチームの人と協力して、漢字カードをどのような意味グループに分けられるか考えます。
- 3: 分け終わったら手を挙げて教師に知らせます。



- 4: 教師は最初に活動が終わったチームを指します。
- 5: そのチームの人は「この漢字は青・赤・黒・白です。そして色グループです。」のように説明します。
- 他のチームの人たちは、その説明が正しいかどうか言います。(○×カードを挙げるのもいいでしょう。)
- 6: 説明に間違いがあったら、教師は次のチームを指します。
- \* 活動中、わからない漢字があったら教科書や辞書で調べてもいいことにします。

### ◆送り仮名はなに？

教室全体で行う活動です。動詞の送り仮名によってグループを作ります。漢字1字1字の意味や送り仮名の付け方に注目します。

### 準備

教師はこれまでに指導した漢字から動詞で使う漢字を9～12字選びます。例えば[歩・行・書]が[～く]グループ、[住・飲・読]が[～む]グループ、[帰・切・走]が[～る]グループのように、送り仮名が同じものでグループが作れるようにします。

### 活動方法

- 1: 黒板の左側に漢字カードをばらばらに置きます。動詞にしたときに同じ送り仮名になる漢字を集めて、グループを作るように指示します。
  - 2: 1人ずつ学習者が黒板の前に出て、好きな漢字カードを1枚選びます。そして「これは読むです」のように動詞の形で言って、黒板の右側に貼ります。
  - 3: 順番に学習者が前に出て、説明して、同じ送り仮名が付く漢字が集まるように貼っていきます。
  - 4: 漢字の読み方や送り仮名に間違いがあったら、カードを元の場所に戻します。
  - 5: 最後にそれぞれのグループに共通する送り仮名をクラス全体で確認します。
- \* わからない漢字が残っていたら、教科書や辞書で

調べてもいいことにします。

- \* 2～4人のグループで机を使って活動することもできます。

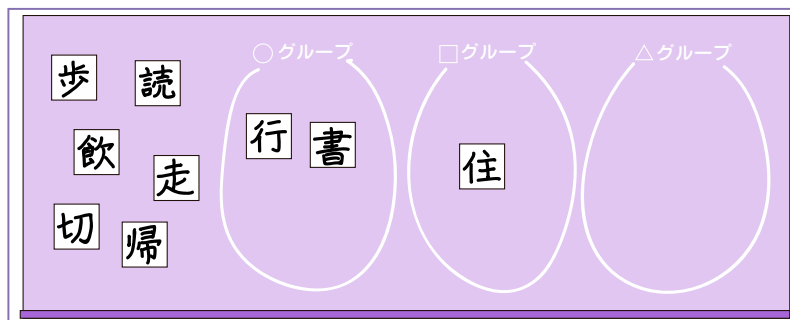
### ◆その他の活動例

そのほか、①漢字を画数順に並べる、②反対の意味の漢字でペアを作る、③同じ読み方(音読み)の漢字をグループにする、④同じ品詞の漢字をグループにするなど、カードを使ったさまざまな活動が考えられます。意味や品詞に注目したグループは、漢字1字1字のコアミーニング(中心的な意味)を確認する機会になります。コアミーニングは、中級以降の漢字・語彙理解に役立つ知識になっていきますから、漢字のコアミーニングに注目した活動を授業に取り入れていきましょう。

### ◆活動メモ

- 教師は活動の中で、知らない漢字があったら、ノートに書いたり、リストに加えたりするなど、自分で工夫するように促しましょう。
- 時間制限を設けると楽しさが増すでしょう。
- 学習者が知っている漢字だけでなく、これから学習する漢字を少し入れておくと、ゲームを通して楽しく漢字を学ぶこともできます。
- 学習者が活動方法に慣れてきたら、学習者同士で問題を作り、お互いに答え合う活動もできるでしょう。

授業を「コミュニケーションをとりながら楽しく学ぶ時間」と考えると、漢字指導にも「だれかと一緒に楽しみながら学ぶ活動」が必要ですね。漢字を友だちと楽しみながら学ぶことは、学習意欲を高めたり維持したりすることにもつながっていくでしょう。また、漢字をたくさん書いて覚えるだけではなく、漢字の意味や形で整理することは、理解や記憶の助けにもなります。学習者が漢字も「だれかと楽しみながら学べる」「自分たちで工夫しながら覚えていける」と思えるように、さまざまな活動を考えていきましょう。



このコーナーの担当者：濱川祐紀代・中村雅子／日本語国際センター専任講師

読者のみなさんからのアイデア、成功例、失敗例などぜひお寄せください。

バラバラ漢字カード・サンプル

日

寺

山

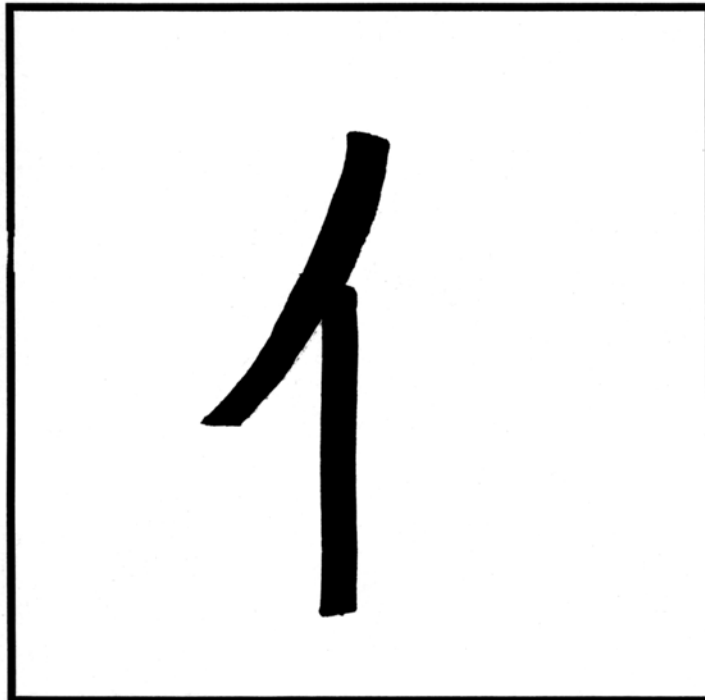
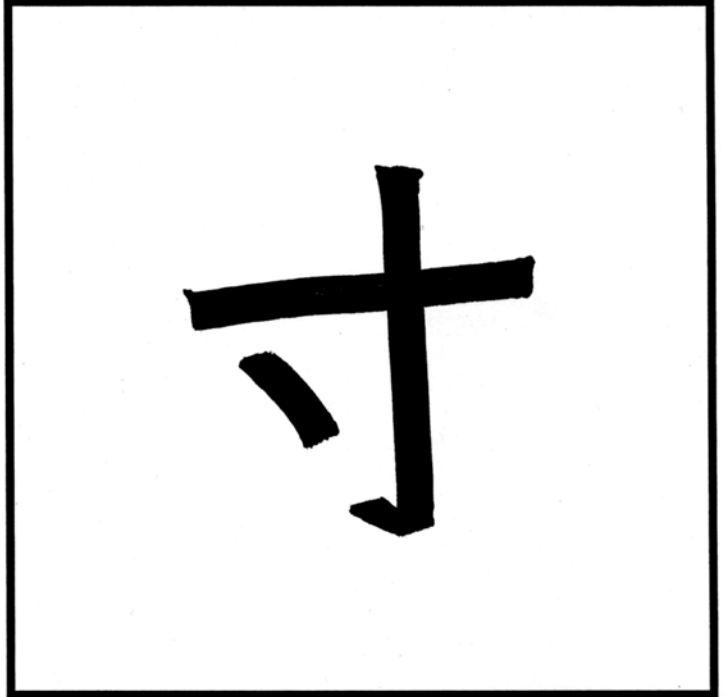
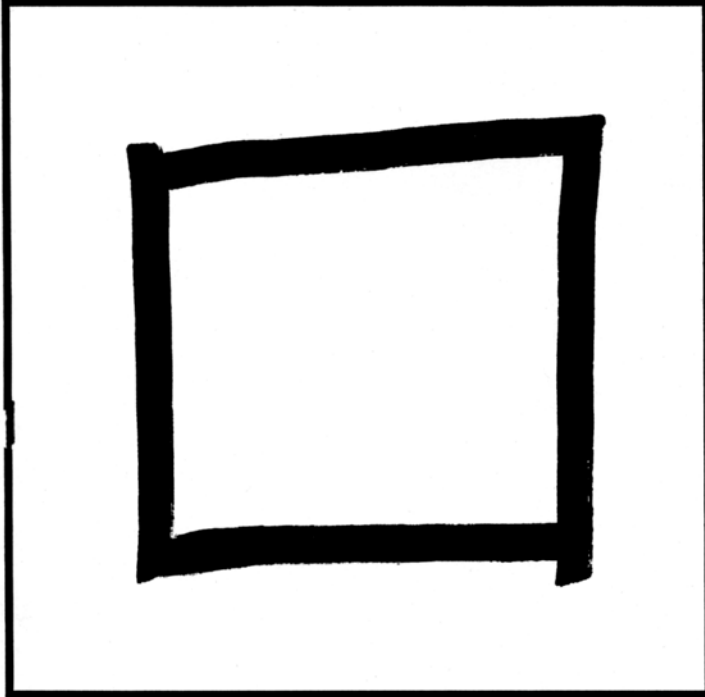
子

甬

之

門

口





# 新聞・雑誌から見る現代日本

しんぶん ざっし し み げん だい に ほん

第32回

世襲議員の是非

このコーナーでは、新聞・雑誌の記事を通して現代日本事情の紹介をするとともに、日本語を教える先生方が新聞・雑誌の記事などの生教材をどうやって教材化し、中・上級の日本語の授業にどう活用できるかを提案していきます。

## 読む前に

みなさんは、親の仕事を将来自分もしたいと思ったことがありますか。あるいは、自分の今の仕事を子供に継いでもらいたいと思いませんか。どうしてそう思いませんか。子供が親や親族の仕事や地位を引き継ぐことを世襲と言ひ、日本の場合、能や歌舞伎などの役者、茶道や華道の家元のように伝統の継承が重んじられる世界では世襲が一般的です。また、個人経営の店や町工場なども家業として世襲されるのが普通です。

では、政治の世界ではどうでしょうか。ここ3代の首相だけを見ても、安倍元首相の祖父、福田前首相の父、麻生首相の祖父も首相でした。野党に目を向けても、5月に新しく民主党代表となった鳩山氏（記事が書かれた時点では幹事長）の祖父も過去に首相を務めています。

首相だけでもこのように世襲が目立つぐらいですから、国会議員全体ともなると、世襲の数はさらに多くなります。やはり親や親族が議員であれば、本人も議員になりやすいのでしょうか。確かに、世襲議員は三バン、つまり、「かばん」（お金）、「看板」（名前）、「地盤」（選挙区の後援会等の組織）を親や親族からそのまま引き継ぐことができ、有利だと言われています。

2009年は、日本にとって重要な総選挙（衆議院議員選挙）の年です。前回の総選挙が行われたのは2005年9月11日で、衆議院議員の任期は4年ですから、近いうちに新しい議員を選ばなければなりません。以前から議論のある世襲問題ですが、総選挙が近づくとつれ、この問題が活発に論じられるようになってきました。

みなさんは、議員の世襲についてどう思いますか。今回は、この問題に関する朝日新聞社の調査結果に基づく5月9日付の記事を2つ、毎日新聞の5月11日付の関連記事を1つ、読んでみましょう。

## 参考ウェブサイト A

■ The Japan Times Online “Hereditary politicians a fact of life -Some in LDP call for curbs on blue bloods-”

(2009年4月27日) (英語) <http://search.japantimes.co.jp/cgi-bin/nn20090427a2.html>

■ 毎日小学生新聞「政治 政治家の世襲 なりたい人をはばむ壁」(2009年5月24日)

<http://mainichi.jp/life/edu/maishou/mado/archive/news/2009/20090524kei00s00s2000c>

質問1: みなさんの国でも議員の世襲がありますか。そのような世襲は、どのように思われていますか。周囲の人に聞いたたりして、調べてみましょう。

質問2: 記事(1)と記事(2)のグラフからどんなことがわかりますか。本文を読む前にグラフを見てわかったことをお互いに話し合ってみてください。例えば、世襲の割合が一番大きいのは、現職衆議院議員、次期衆院選(衆議院議員選挙)立候補予定者、閣僚、の3つのグループの中でどのグループでしょうか。また、与党の自民党と野党の民主党では、どちらのほうが世襲の割合が大きいですか。

## 読もう

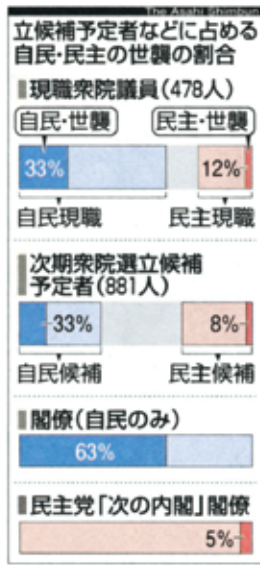
質問3: 記事(1)の見出しとリード文に「世襲」という言葉がありますが、ここで言う「世襲」は、どういう意味ですか。その意味を説明している記事本文の部分を書き出してください。

記事(1)

# 世襲133人立候補予定

次期総選挙に立候補を予定している881人(7日現在)のうち、親や親族から地盤を引き継いだ「世襲」は133人(15%)にのぼることが、朝日新聞社の調査でわかった。民主党では立候補予定者の8%だったのに対し、自民党は33%と約4倍。立候補予定者より現職議員、閣僚の方が世襲割合が高く、当選や出世に影響していることもうかがえた。

(高橋純子) 4面に関係記事



国会議員だった親や親族と同じ選挙区から立候補したり、選挙区の一部が重なっていたりする人を世襲と分類した。親や親族の地盤を引き継いでいない人も含めると、計176人になり、立候補予定者の20%にあたる。世襲をめぐる「地元での活動に割く時間が少なく、済み、国政に集中できる」などと評価する声の一方、「他

## 自民の33% 民主は8%

次期総選挙 本社調べ

の優秀な人材が立候補する妨げになる」との批判も強く、制限の是非が総選挙の争点となる可能性がある。民主党は、3親等以内の親族が連続して同じ選挙区から立候補することを認めない方針を決め、次期総選挙から適用する方針。自民党でも、菅義偉選挙対策副委員長が次の総選挙からの制限を唱え

一方、現職衆院議員を調べると、世襲の割合はより高くなり、478人のうち119人が25%。自民では現職の33%にあたる101人、民主は12%にあたる13人が世襲だ。閣僚ではさらに割合が高く、麻生首相を含めた17人

▲朝日新聞(朝刊) 1面 2009年5月9日

記事(2)

# 世襲の当選率 7〜8割前後

次の総選挙の立候補予定者のうち、世襲が占める割合は15%。現時点では最近の選挙の世襲割合を上回っており、世襲が減る兆しはみえていない。

09年は7日現在の立候補予定者

■衆院選での全候補と世襲候補の数、当選率の推移

	90年	93年	96年	00年	03年	05年	09年
全候補	953人	955人	1503人	1404人	1159人	1131人	881人
当選率	53.7%	53.5%	33.3%	34.2%	41.4%	42.4%	—
世襲候補	169人	158人	162人	152人	150人	143人	133人
全候補のうち世襲候補の割合	17.7%	16.5%	10.8%	10.8%	12.9%	12.6%	15.1%
世襲候補の当選者	125人	132人	122人	110人	122人	118人	—
世襲候補の当選率	74.0%	83.5%	75.3%	72.4%	81.3%	82.5%	—

朝日新聞の調査で、立候補予定者に占める世襲の割合よりも、現職衆院議員に占める割合が高いのもそのためだ。閣僚では世襲の占める割合がより高く、「出世のしやすさ」にもつながっている。一方、民主党で世襲の割合が低いのは、09年結党の若い政党で代替わりが進んでいない。世襲ではない政治家の中には、自民党の世襲候補と選挙区が重なって民主党を選んだ人がいる——などが影響しているともみられる。

▲朝日新聞(朝刊) 4面 2009年5月9日



# 風知草

専門編集委員 山田孝男

江戸時代に詳しい文芸評論家の野口武彦(し)によれば、幕末、幕府上層部から人材がいなくなつた最大の原因は大名と旗本の世襲制である。門閥による要職の独占が長く続き、バカ殿とダメ役人を輩出したというのである(「政体の末期に人材が払底するのはなぜか」中央公論08年12月号)。

将軍と老中がコロコロ代わつた幕末と首相がコロコロ代わつた現代は似ている。雑誌にそう書いた野口に「最近の国会議員の世襲禁止論議をどう見えていますか」と聞いてみたが、「慶応の改革ですよ」という言下の寸評の含蓄が深い。  
ケイオウノカイカク。将軍吉宗の「享保の改革」や松平定信の「寛政の改革」なら教科書に出てくるけれども、そんなのあったっけ……。あったのである。慶応2(1

866)年、徳川慶喜は駐日フランス公使ロッシュの助言に従い、幕臣・小栗上野介忠順を用いて郡県制の導入など思い切つた改革構想を打ち出した。が、翌々年、イギリスと結んだ薩長主導の明治維新にのみ込まれ、忘れられてしまう。

すと感じている。総選挙を控え、にわか政治論戦の焦点に浮上してきた議員世襲規制問題で先行したのは民主党だった。昨年来、政治改革推進本部(本部長・岡田克也副代表)で議論を重ね、「党内規を設け、世襲候補を同じ選挙区で公認しない」「政治資金規正法を改正し、政治資金管理団体(献金の受け皿)の継承を禁ずる」と決めた。一方、自民党。同党所属衆院

議員の4割が世襲(民主党は2割弱)で、麻生太郎首相自身と16閣僚中の10人がそうだ。である以上、この問題で民主党と張り合うことはないと思つていたが、違つた。仕掛けたのは菅義偉選挙対策副委員長。先月13日、いきなり世襲候補の立候補制限をぶち上げ、「自民党もそこまでやるのかと思われないと選挙に勝てない」とたたみかけた。党内たちまち騒然、森英介法

相に至っては「大正13年から一族で議席をいただいている」と言わずもがなの反撃に出、世間に強烈な印象を与えた。ケンカ上手の菅らしい手際だが、結局どうするのか、党内議論は煮詰まっておらず、話題づくりにとどまっている。民主党はもちろん、自民党も議員世襲制限の選挙公約化を探るといふ。両党が体質改善を競うのはけっこうなことだ。それはそれでいい。

## 世襲禁止はいいけれど

それと同じで、議員世襲規制という方向性は間違っていないが、規制自体は大変革の前の小改革にすぎない。それよりも大局を読み、全体を動かす政治家の器量が問われている。

議員世襲規制などどうでもいと言いたいのではない。それどころか、時代の気分を反映した世襲批判の高揚が政界を根底から揺さぶっており、このプレッシャーが大きな変化を生み出



題字・絵 五十嵐晃 (毎週月曜日掲載) 2009. 5. 11

秋までに必ず行われる衆院総選挙を経て強力な政権が生まれ、明治維新のような大改革が動き出すという保証はどこにもない。が、経済対策にせよ、新型インフルエンザにせよ、行政の各分野で重要な決断が求められる場面が増えている。外国の判断や前例に頼れないという点、幕末とよく似ている。政党改革が終わわり、世襲候補が封じ込められてからようやく現れる人材を待っている間に合わない。目の前の矛盾と戦って旧弊を破り、はい上がってくる人物が必要だ。(敬称略)

- 質問 4: 記事(1)のリード文の最後に「当選や出世に影響していることもうかがえた」とありますが、何が当選や出世に影響しているのですか。
- 質問 5: 記事(1)で、世襲について、いいと言われているのはどのような点ですか。あまりよくないと言われているのはどのような点ですか。
- 質問 6: 記事(2)の本文3行目に「最近の選挙」とありますが、いつの選挙ですか。グラフを参考にして、「最近」の言い換えとなっている語句を本文から探してください。

質問7：記事(3)によれば、幕末(江戸時代の終わりごろ)と現代は、どんな点が似ていますか。似ている点を2つ書いてください。

質問8：記事(3)の見出し「世襲禁止はいいけれど」の後に続く表現として次のどれがいいですか。記事全体を読んで一番適切なものを選んでください。

- (1) 自民党と民主党が協力しなければ難しい。(2) そのためには強力な政権が必要である。  
 (3) 重要な政治全体のことも忘れてはいけない。(4) それで世襲が完全なくなるわけではない。

## 読んだ後で

質問9：みなさんは、議員の世襲についてどう思いますか。制限したほうがいいと思いますか。しないほうがいいと思いますか。まず、自分の意見とその理由を書き出したあとと発表し、その後でみんなで話し合ってみましょう。

質問10：実際に世襲候補者は何人当選したか、自民党と民主党はこの問題にどう対応したか、総選挙が終わったあとウェブサイトなどで調べてみましょう。

### 〈解答例〉

質問1：(省略) 質問2：(省略)

質問3：「国会議員だった親や親族と同じ選挙区から立候補したり、選挙区の一部が重なっていたりする人」

質問4：立候補予定者が世襲であるかどうか

質問5：いいと言われている点：地元での活動の時間を少なくでき国政に集中できること

よくないとされている点：他の優秀な人材が立候補できなくなってしまうこと

質問6：96年の総選挙以降

質問7：(1) 国の指導者がよく代わる点 (2) 重要な問題があり外国や前例に頼れない点

質問8：(3) 質問9：(省略) 質問10：(省略)

### 参考ウェブサイト B

East Asia Forum “Japan: combating botchan rule” (2009年4月29日) (英語)

<http://www.eastasiaforum.org/2009/04/29/japan-combating-botchan-rule/>

NHK 解説委員室 時論公論「議員世襲 制限は必要か」(2009年5月7日)

<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/19447.html> (NHK オンライン <http://www.nhk.or.jp>)

東京財団 論考「世襲議員と政策形成のあり方について—「政治主導」時代へのインプリケーション— (1)」(2009年2月12日)

<http://www.tkfd.or.jp/topics/detail.php?id=121>

### 〈解説〉

政治の話題は今まであまり取り上げてきませんでしたが、今回は議員の世襲に関する記事を選び、実際の教室活動の流れにそって質問と記事を提示しました。

久しぶりのグラフ付き記事ですが、「読む前に」でグラフを見て記事本文の内容を予測する練習を取り上げました。また、今回は背景知識として役立つような参考ウェブサイトをここでも紹介しました。

「読もう」では、見出し・リード文・本文の関連付けを問う問題、明示されていない主語を前後関係や文章全体から考える問題、等を練習に含めました。キーワードは、特に取り上げてはみませんが、「総選挙」、「世襲」、等の理解がこの練習を行う上で欠かせないことは言うまでもありません。

「読んだ後で」では、この記事が書かれた5月以降この問題がどのような展開を見せているのか調べ、その結果を確認することを促す質問も含めました。参考ウェブサイト B はさらに詳しく調べたい人のためのものです。

このコーナーの担当者：浜田盛男・林敏夫／関西国際センター日本語教育専門員

今回取り上げたテーマや練習案についてのご意見をお待ちしています。また、今回の記事を使って授業をしたときの様子や結果などお寄せください。





# 文法を楽しく!!

ぶん ぼう たの

「とたん (に)」  
と「や否や」

皆さんは今までこの『日本語教育通信』で、「雨が降ったら、試合は中止だ。」「通訳になるために、日本語を勉強している。」のような文を勉強したことがありますね。これらの文は、まず、文1があって、次に文1と文2を結ぶもの(接続形式)が続き、文2によって全体がまとまります。「文1+接続形式」を従属節、「文2」を主節と呼びます。

## 雨が降ったら、試合は中止だ。

文1	接続形式	文2
ぶん	せつぞくけいしき	ぶん
従属節		主節
じゅうぞくせつ		しゅせつ

日本語には、同じような意味なのに異なる接続形式を持つ従属節がたくさんあります。「雨が降ったら／降るとき／降った場合」「雨が降るから／降るために／降ったせいで／降ったおかげで」などなどです。

今回は、「従属節内の事柄が終わると、すぐに主節の事柄を行う／主節の事柄が起こる」という意味の「とたん(に)」と「や否や」について考えます。

「や否や」は上級レベルの表現ですが、書きことばとしてよく使われるので取り上げました。初めての方は挑戦してみてください。また、「とたん(に)」の「に」は省略可能です。本文には「とたん」「とたんに」の両方が現われます。

さて、問題です。次のストーリーを読んで、問題1をしてください。

### ストーリー

駅のプラットフォームに一つの荷物が置かれていました。誰が何のために置いたのかわかりません。

そのとき、一人の駅員が近づいてきて、その荷物を持ち上げようとしてました。

**問題1:** 次の文の後半を完成して、ストーリーの続きを作ってください。

- (1) (駅員は) 荷物を持ち上げたとき、  
(2) (駅員は) 荷物を持ち上げるや否や、

いかがですか。わかりにくかった人は、次の a, b のどちらが (1) (2) に続きやすいか考えてみてください。

a. あまりの重さに腰を抜かしてしまった\*。

b. 荷物を持って走り出した。

(\*「とても重くて、座り込んだまま立ってなくなってしまった」の意味。)

できましたか。

(1) - a、(2) - b になった人が多いと思いますが、どうでしょうか。a と b の違いは、a が「突然の事態の発生(予想していなかったことが急に起きること)」を、b が人の「意志的な動作・行為(「しよう」と思って行う行動)」を表しているということです。文を完成すると、次のようになります。

(3) (駅員は) 荷物を持ち上げたとき、あまりの重さに腰を抜かしてしまった。



(4) (駅員は) 荷物を持ち上げるや否や、荷物を持って走り出した。



(3) に「や否や」(4) に「とたん(に)」を用いると、間違いとは言えないけれど、次のように少し不自然な文になります。

(5) ? (駅員は) 荷物を持ち上げるや否や、あまりの重さに腰を抜かしてしまった。

(6) ? (駅員は) 荷物を持ち上げたとたん、荷物を持って走り出した。

以上のことから、「とたん(に)」の主節には「突然の事態の発生」が、「や否や」の主節には「意志的な動作・行為」の事柄が来やすいということが言えそうです。

では、もう少し「とたん(に)」と「や否や」の使い方について見ていきましょう。問題です。

**問題2:** 次の(7)～(11)において、まず「▶」の前の事柄が起り、そのあと「▶」の後ろの事柄が続いたとします。後ろの事柄が「事態の発生」ならaを、「動作・行為」ならbを( )の中に入れてください。

- (7) 会った▶好きになる( )  
 (8) 会った▶プロポーズする( )  
 (9) CD-ROMを入れる▶フリーズする( )  
 (10) 玄関にカバンを置く▶外へ飛び出していく( )  
 (11) 振り向く▶殴られる( )

いかがですか。(7)-a、(8)-b、(9)-a、(10)-b、(11)-aになりましたか。(5)で、「殴る」なら人の動作・行為ですが、受身の「殴られる」は事態になります。

「とたん」は漢字で「途端」と書くように、「道(プロセス)の端」を表し、そのことが起こった最初の瞬間を強調します。「や否や」もよく似ていますが、「従属節の事柄を、意志的に、待ち構えていて」という時によく用いられます。「待ち構えて」というのは、「次の行動をしようと今か今かと待っている」という様子を表します。つまり、「待ち構えて」なので、主節には動作主の意志が入る場合が多いです。

では、問題2の(7)～(11)を文にしてみましょう。

- (7)' 彼は会ったとたんに、彼女のことが好きになった。  
 (8)' 彼は会うや否や、彼女にプロポーズした。  
 (9)' CD-ROMを入れたとたん、フリーズしてしまった。  
 (10)' うちの子は毎日、玄関にカバンを置くや否や、外へ飛び出していく。  
 (11)' 私は振り向いたとたんに、誰かに頭を殴られた。

皆さんの頭の中には「とたん(に)」=「突然の事態の発生」、「や否や」=「待ち構えての動作・行為」という図式

ができたことと思います。ところが、次のように、事態を表す文にも「や否や」が用いられることがあります。

- (12) 空が暗くなるや否や、大粒の雨が降り出した。  
 (13) 番組が終わるや否や、放送局にたくさんの電話がかかってきた。

「雨が降り出す」「電話がかかってくる」は両方とも事態ですが、ここでは「や否や」が可能になっています。このことは、「や否や」は「動作・行為」だけでなく、「事態の発生」も表せることを意味しています。

ところが、「とたん(に)」と「や否や」ではニュアンスがどこか違うのですが、どうでしょうか。(12)と(14)、(13)と(15)を比べてください。

- (14) 空が暗くなったとたん、大粒の雨が降り出した。  
 (15) 番組が終わったとたん、放送局にたくさんの電話がかかってきた。

「とたん(に)」は「突然その事態が起きた」その瞬間を表していますが、「や否や」は、同じ事態の発生でも、「空が暗くなる」「番組が終わる」のを待っていたかのようにすぐに、次の事態が起こったという「待ち構え」の意味合いが含まれています。

では、最後に、「～と、すぐ」は、「とたん(に)」「や否や」とどう異なるかについて簡単に触れておきます。

- (16) 味方チームが(負け始めたとたん/負け始めるや否や/負け始めるとすぐ)、見物客は帰り始めた。

これは野球場の様子ですが、「負け始めたとたん」は、1秒の間も置かないぐらいすぐに客が帰ってしまう様子を、よりリアルに強調した形で表し、「負け始めるや否や」は、客が「負けるのはおもしろくない。負け始めたらすぐに帰ろう(と待っていた)」という「待ち構え」の勢いや意志を感じさせます。一方、「～と、すぐ」は中立的に客の動きを述べており、帰り始めるのも、1、2分、時間を置いても大丈夫と言えるでしょう。

参考文献:

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

このコーナーの担当者：市川保子(日本語国際センター客員講師)

読者のみなさんからのアイディア、成功例、失敗例などぜひお寄せください。



# 本ばこ

ほん

## 一新刊教材・図書紹介一

しん かん きょう ざい と しょ しょう かい

テストって、こうやって作るんだ！

### 『日本語教師のためのテスト作成マニュアル』

著者：伊東祐郎 出版社：株式会社アルク

URL：http://www.alc.co.jp/

発行年月：2008年10月

ISBN：978-4-7574-1471-6

判型・頁数：A5判、168頁

定価：2,310円



テスト作りに苦勞している、という日本語教師は案外多いのではないのでしょうか。評価に関する参考書と言えば、テストの種類がどうか、結果の統計的分析といったイメージがあるかもしれませんが、この本には数学の計算式は出てきません。測りたい学習者の能力や知識が何で、それをどうやってテスト問題にするのか、テストの作り方の具体的な手順を教えてくださいのがこの本です。

### ▽測ろうとする日本語能力から考えます

この本では、各クラスで行う中間試験や修了試験、プレースメントテストなど、多く教師にとって身近なテストに焦点が当てられています。そして、「文法」「語彙」「文字」「作文」「会話」「読解」「聴解」のそれぞれのテストについて、作成する上で必要となる事項を整理・確認し、テストの設計図である「細目表」を作る手順が説明されています。例えば7章の「読解テストを作る」は次のような構成と内容になっています。

- ① 読解力とは：読解力を構成する能力（文法能力、社会言語学的能力、談話能力など）を確認する。
- ② 読解の指導目標：指導目標となる読解のスキルを、初級前半から中級後半まで具体的に細かく記述したものを例示して、テストで測定しようとする力を確認する。
- ③ 読解テストの作成手順：「テスト目的を明確化する」「読解テキストを選定・作成する」「問題を作成する」「期待される応答を作成する」「評価基準・採点表を作成する」という手順を一つ一つ確認する。
- ④ 読解テストの細目表：細目表の具体例を示す。



p.132-133

### ▽良いテスト作りは簡単ではありません

本のタイトルは「マニュアル」ですが、これに沿って作ればテストが簡単に作れるというわけではありません。指導項目を整理・分析し、テスト項目を選び、形式を考える作業は一人ひとりの教師がしなければならないことです。また、改良を重ねることも必要な作業です。この本の著者も述べているように、この本で紹介された方法は一例であって、他の考え方や方法もあるでしょう。しかし、この本の手順でテストを考えることで、これまでの自分自身のテスト作成方法を振り返ることができ、また、これまで授業で指導してきたものが十分だったのか考え直すきっかけとなるでしょう。より良いテスト作りを目指す人、テストをどこからどうやって作ればいいのかわからない人に、この本は貴重なヒントを与えてくれることと思います。



# 本ばこ

ほん

— 新刊教材・図書紹介 —  
しん かん きょう ざい と しょ しょう かい

非漢字圏初級学習者の視点で作られた  
ストーリーで覚える漢字 300

～英語・インドネシア語・タイ語・ベトナム語版～  
～英語・韓国語・ポルトガル語・スペイン語版～



著者：ボイクマン総子、渡辺陽子、倉持和菜 監修：高橋秀雄 出版社：株式会社くろしお出版

〈英語・インドネシア語・タイ語・ベトナム語版〉 URL: <http://www.9640.jp>

発行年月：2008年11月 ISBN: 978-4-87424-428-9 判型・頁数：B5判、316頁 定価：1,890円

〈英語・韓国語・ポルトガル語・スペイン語版〉 URL: <http://www.9640.jp>

発行年月：2008年1月 ISBN: 978-4-87424-402-9 判型・頁数：B5判、344頁 定価：1,890円

非漢字圏の初級学習者に漢字を教える際、「山」「川」といった象形文字から導入することが多いと思います。視覚的イメージを通して漢字に親しみを持ってもらえるにはいい方法なのですが、すぐにネタがつかってしまうという話にもよく聞きます。実際、漢字の中で象形文字の割合は多くありません。本書には、そんな悩みを解決するヒントがあるかもしれません。

## ▽まず、漢字の意味を覚える

本書は、300字の初級漢字について、独自の解釈によるイラストとストーリーが書かれています。それは、もともとの漢字の由来とは違うものもあります。構成は2部に分かれていて、まず150字の字形と意味を覚えて、その後で読み方と書き方を覚えるようになっていきます。日本人にとって、漢字の読み方を後で覚えるというのはちょっと驚きの発想ですが、非漢字圏の学習者にとって、一つの漢字を覚えるときに、字形を認識し、意味、読み方、書き方を同時に学習するというのは確かに大きな負担でしょう。読み方は多数あるので、なおさらです。

## ▽学習者の負担を考慮した段階的な学習

効果的に学習するために、この本では、段階的な学習の流れが考えてあります。①漢字の意味をイラストやストーリーで覚えた後、②字形の組み合わせで新たな漢字の意味が推測できるように、③またその漢字を使用した語彙の意味も推測できる力を養い、④最後に読み方と書き方を覚えます。

例えば、①「主」という字をろうそくに見立て、「昔、ろうそくが使えたのは主人だった」というストーリーがあり、②「ろうそくに水を注いで火を消す…注」という次のストーリーにつながり、③練習問題で「注意」の意味を推測させた後、④読み方と書き方を覚えるという具合です。

また、扱っている漢字熟語で、日本語能力試験3級4級の語彙がほとんどカバーできるということです。

## ▽楽しんで使い方を工夫できる

この教材の特徴である、漢字の意味を覚えるためのストーリーは、字源とは違うものもあり、無理な解釈だなあと思うものもあります。でも、それがかえって印象に残る場合もあります。もしそのストーリーに馴染めない場合は、学習者自身が漢字を分解して独自のイメージを作ればよいのではないのでしょうか。それを楽しむことができれば、未習の漢字に出会った時、推測する力でも乗り切れるかもしれません。

独学用として、またクラスで漢字指導の時間を割くことができない場合に、本書を使って自習させ、クラスで簡単なクイズを行うなど、使い方も目的に合わせて工夫できるように作られています。



p.123



# 本ばこ

ほん

## 一新刊教材・図書紹介一

しん かん きょう ざい と しょ しょう かい

### 動詞と名詞のいろいろな組み合わせを練習するための教科書 初級から中級への日本語ドリル 〈語彙〉

どう し せい し ろく あ れん しゅう ぎょう かい しょ

著者：松本節子、佐久間良子 出版社：株式会社ジャパンタイムズ

ちよしゃ まつもとせつこ さくくまらよしこ しゃっぺんしゃ かふしきがいしや

URL: <http://bookclub.japantimes.co.jp>

発行年月：2008年11月

はつこうねんげつ ねん がつ

ISBN:978-4-7890-1329-1

判型・頁数：B5判、128頁

はんけい ページすう はん ペーじ

定価：1,260円

ていか えん



日本語の動詞は組み合わせの名詞によって意味がかわってしまうことがあります。たとえば、「切る」は、「紙を切る」ときは「カットする」という意味ですが、「電話を切る」場合はちがう意味になります。初級では「紙を切る」という意味での「切る」をならいますが、中級からはならった動詞をいろいろな意味で使い分けることを勉強します。本書は、〈あがる・あげる〉や「よむ」などの基本的な動詞をとりあげて動詞のいろいろな意味を勉強すると同時に、語彙をふやし、自然な日本語を身につけることをめざしています。



p.2-3

### ▽語彙の力で初級と中級をつなぐ

本書は以下のような特徴があることから、海外で初級から中級へすすむ学習者の教材としてクラスでも使えますし、自習用にも使えます。

- 「練習」と「問題」がたくさんあり、また答えもついているので、問題をやりながら、語彙をふやしていくことができます。
- 日常的によく使われている語彙なので、確認や復習にもなりますし、会話の力をのばすこともできます。
- 英語、中国語、韓国語の翻訳がついているので、これらの言語がわかる人には辞書でいちいち調べなくても意味をはやく理解できて、便利です。

### ▽練習はステップ・バイ・ステップで

各課の構成は、以下のようになっています。  
「確認しましょう」…例文でその動詞の意味をどれぐらい知っているかをチェックします。

「覚えましょう」…見やすい表で名詞と動詞の組み合わせをおぼえます。

「練習」…基本的な練習問題と応用のための練習問題をやりながら、動詞のいろいろな意味をしっかりと理解しておぼえます。

「解きましょう」…正しくおぼえたかどうかをチェックするための練習をします。

また、本の最後に「総まとめドリル100」があり、ここで自分の実力をためすことができます。

この教材には、姉妹編として初級文型を復習するための『初級から中級への日本語ドリル 〈文法〉』もあります。これから中級にすすむ人に、この2冊がやくにたつことでしょう。



# 本ばこ

ほん

## 一新刊教材・図書紹介一

しん かん きょう ざい と しょ しょう かい

省略を通して日本語の文法が見える

### 『日本語の省略がわかる本—誰が？誰に？何を？』

How can we know who did what to whom in Japanese? [The Grammar of Omission: Less is More]

著者：成山重子 出版社：株式会社明治書院

URL：http://www.meijishoin.co.jp/ 発行年月：2009年2月

ISBN:978-4-625-43425-9 判型・頁数：A5判、144頁 定価：1,575円



- 田中さんに会ったら、とても楽しそうだった。
- 田中さんが大川さんに会った時、あまり楽しそうではなかった。

あなたは、1と2の文から、「楽しい」または「楽しくない」と感じたのはだれかわかりますか。日本語母語話者ならすぐに分かることでも、日本語学習者には難しく感じられることがたくさんあります。次は？

- ジョンは行こうと思っている。
- 3では、「思う」のは「ジョン」だということはどうでしょう。しかし次のような場合はどうでしょうか。

4. ジョンは行くと思っている。  
実は4は意味が曖昧です。というのは「思う」の主語が「ジョン」なのか「(ジョン以外の)他の誰か」なのか、この一文だけでは決まらないからです。したがって「行く」のが「ジョン」なのか「他の人」なのかも分かりません。次はどうでしょうか。

- 母が帰ってきたので、電話を切った。
- 「(電話を)切った」のは誰ですか。そうです。母以外の誰か(私など)です。では次の6で「働いた」のは誰でしょう。

- 太郎が日本に帰ってから働いた。
- 答えは太郎以外の誰かです。

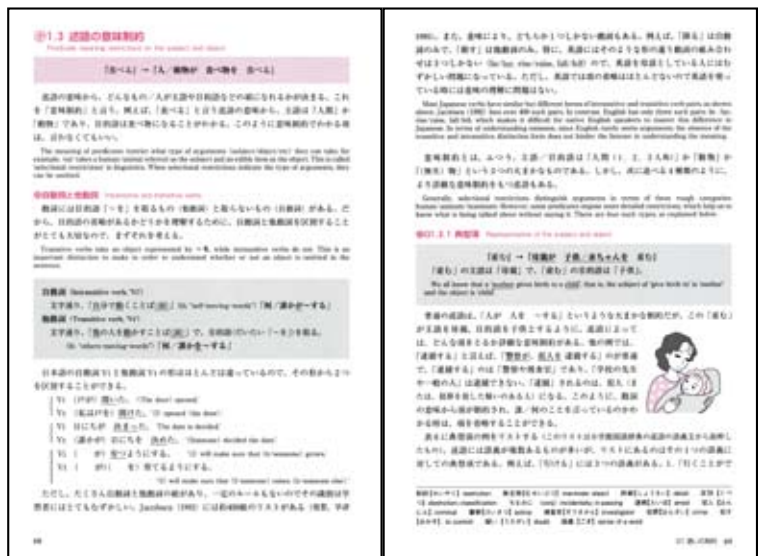
### ▽相互理解はどうして可能となるか

1～6には、文を形作る重要な要素(主語、目的語など)が文面に現れていません(この本ではこれを「省略」と呼んでいます)。ですから、文の意味を完全に理解するには、文の受け手は省略されたものを補う必要があります。逆に言えば、文の送り手は、

何が省略でき、何が省略できないかを知っておく必要があります。本書は、この省略にかかわることがらを文法として捉えて解説したものです。

### ▽省略から入ってさらに大きな視点へ

本書は、日本語の省略がよくわからない、どんなとき省略でき、どんなとき省略してはいけないかわからないという人、学習者にこのような質問をされて説明に困っている教師を対象として書かれています。英語での説明も併記されていますし、各課の最後には練習問題があるので、自分で理解を確認しながら読み進めることができます。また、省略だけにとどまらず、読者はこの本を読むことで、日本語の理解にとって大切な問題(「は」と「が」、主題、主語になる名詞の性質、主節と従属節、やりもらい文など)への理解を深めることができるでしょう。



p.68-69



# 本ばこ

ほん

— 新刊教材・図書紹介 —  
しん かん きょう ざい と しょ しょう かい

あのドラえもんが日本語教材に登場

## 『ドラえもんのどこでも日本語』

著者：稲原教子、マツキヤグ五藤ゆかり、當作靖彦、ヴァージル藤本典子

出版社：株式会社小学館

URL：http://www.shogakukan.co.jp/ 発行年月：2009年2月

ISBN:978-4-09-510134-7 判型：A4判、210頁 定価：2,100円



本教材は、初級を終え、中級に進んだ学習者のために作られました。他の中級教材の補助教材としての位置づけですが、主教材としても使うことができます。一冊です。

登場する主人公は、アメリカの高校で日本語を4年間勉強し、1年間ホームステイをする予定で来日した留学生トム・キャンベル君です。そして、タイトルや表紙からも想像できるように、ドラえもんも随所に登場し、トム君の留学生生活を助けます。学習者は、トム君のホームステイ体験を通して、日本文化に触れながら日本語学習を進めていくことができます。

### ▽トム君と日本文化・日本語を学ぼう

本教材は10章から成ります。各章のトピックは次の通りです。

ついに成田到着／日本の家／地震？台風？大変だ～！／学園祭・クラブ活動／年末年始／病気と健康／生活／メディアとテクノロジー／将来／旅行

それぞれの章は次のような構成になっています。

- ① オープニングページ…これから学習するトピック、語彙、言語機能、読み物の内容、作文の課題、関連事項が英語で書かれています。
- ② まんが…トム君の体験を紹介し、読者の関心をひきつけます。
- ③ 新しいことば…そのトピックで必要な語彙が載っています。新しい語彙を使って文化の比較をしたり、知識の整理をしたりする活動も含まれます。
- ④ 思い出してみよう…初級で学んだ文型や表現を思い出し、使いこなせるようになる練習をします。
- ⑤ チャレンジしてみよう…③④で学習した文法や

語彙を使って、実際に話したり書いたりする練習をします。

- ⑥ 読んでみよう…トピックに関連した読み物を読み、質問に答えた後、内容を深めるディスカッションをします。
- ⑦ 書いてみよう…構成に注意しながらトピックに関連した作文を書きます。
- ⑧ 話を作ろう…ドラえもんやのび太君が登場する短いマンガにせりふを入れてストーリーを作ります。
- ⑨ ドラミちゃんコーナー…トピックについての補足情報や、さらに考えたり話し合ったりするための「タネ」が載っています。



p.149

### ▽受身から能動的な日本語学習へ

教師の説明を聞いて知識を増やすタイプの中級教材と違い、学習者が自分で調べてまとめる、自分の言葉で伝える、物事を客観的・分析的に考える活動が多く取り入れられているところが本教材の大きな特徴と言えるでしょう。アメリカのナショナルスタンダーズを意識し、アメリカ人の学習者を想定した活動が多く設定されていますが、自国の学習者に合うように教師が工夫を加えれば、どこの国でも使うことができます。

インターネットで情報収集をする活動がありますが、専用ホームページ「どこでもweb」(http://dokodemo.shogakukan.co.jp/)を使えば、検索をスムーズに行うことができ便利です。